



遊牧がモンゴル経済を 変える日

小長谷有紀編著
出版文化社
定価：1,800円＋税

本書の編著者である小長谷さんは、モンゴルをフィールドに遊牧とその文明を研究する、気鋭の文化人類学者である。人間を文化・社会の面から実証的に研究するのが文化人類学だが、実証的研究ということでは文化人類学者多しといえども、この人の右に出る者は恐らくないだろう。

実証的研究とは、いうまでもなく単に思考だけによるのではなく、経験的事実の観察・実験にもとづいて積極的に論証していく研究手法のことである。小長谷さんはそのための装置として自らがNPO法人「モンゴル・パートナー研究所」(略称MoPI)を

立ち上げ、モンゴル社会で現実に起きている問題、たとえば貧困といった今日の問題の解決と果敢にかかわっている。そうした研究成果の一つとしてまとめたのが本書である。書いているのは4人の日本人と2人のモンゴル人だが、いずれも30代の若い研究者や実務家たちである。

第I部「市場経済化10年の歩み」では、ODA(政府開発援助)とFDI(海外投資)がモンゴル社会で果たした役割と今後の見通しを実証的に書いている。なかでもODAを担当した永井三岐子さん(政策研究大学院大学博士課程)は、JICAのプロジェクト

調整員・企画調整員として1996～2000年に現地で法整備や地方での水供給プロジェクトにかかわるなど、ODAの実務経験を持っている。その人が「これからの援助は、援助する側が援助を受け入れる国に何を与えるかという、形ではなく双方の観察、交流、議論によってはじめて可能になる」と記しているが、重要な指摘だと思う。

第II部「遊牧の市場経済化への試み」では、遊牧社会を維持しつつ市場経済化を図るにはどうしたらいいか。それをテーマにモンゴル社会でさまざまな実務的取り組みを試みる森真一氏が、同じ考えを持つモンゴル人のブルネー・バートル・ガントゥムル氏と組み、現地で食肉流通革命の実験に取り組んだ記録である。MoPIを活動拠点にした、その大実験は、臨場感あふれた現場報告である。現在モンゴル社会の抱える問題が生き生きとみえてくる。

第III部「環境を保全する経済の挑み」では、遊牧を経済システムに取り込むことで環境保全型経済の創出が可能となると結んでいる。